

ダリアの鉢栽培



《栽培のしおり》

(品種選定)

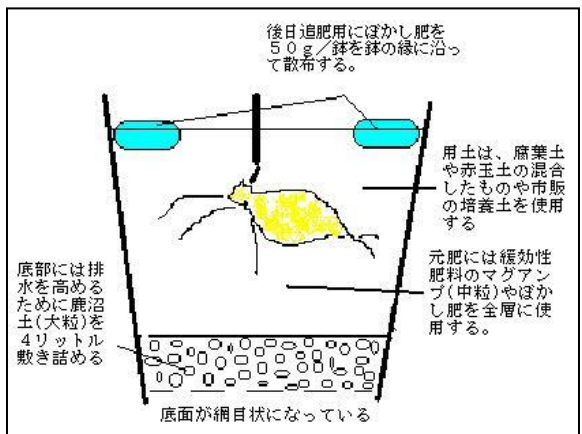
鉢栽培において品種選定はその成功を大きく左右します。(※成功のポイント①)

ダリアは品種が豊富ですが、品種によって花径の大きさや開花数、草丈などが様々で、また、鉢栽培に向き不向きがあるからです。花径の大きさによる品種選定には次の点を考慮しましょう。大輪（花径20cm以上）はスケール感があって素晴らしいですが、品種本来のサイズに（大きく）咲かせるには日常の管理がやや難しく、また、鑑賞可能な開花数が限られてきます。初めての方には、たくさんの花を長く観賞することが出来る手頃な中大輪～小輪（20cm以下）の品種をおすすめします。

(鉢の準備)

一般には通気性に優れた素焼き鉢の10号（直径30cm）を使用しますが、鉢自体が重いために管理が大きな負担となります。また、ダリアが根を張るためのスペース（用土）が一鉢に8～9リットル程度しか入りません。一方、プラスチック製の菊鉢は10号（直径30cm）では用土が12リットル前後入り根張りにはとても有効となり生育を大きく左右することになります。また、底部が網目状になっていますので、排水性と通気性の向上に繋がります。

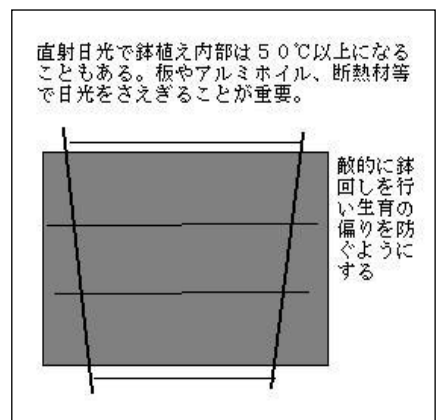
なお、プランターを使用することも考えられますが、樹勢の大きなダリアの（鉢）栽培には30cm程度の深さが必要となります。よって、大型のプランターが必要となります。



(用土と肥料)

排水性を高めるために、下層の1/4に鹿沼土（大粒）を用い、残り3/4を腐葉土や赤玉土、バーミキュライトなどを混同した用土を準備します。なお、市販の培養土には肥料が含まれており、また、土壌改良剤や根ぐされ防止剤がバランスよく混合され、酸度（PH）調整されていますので手頃に使用することが出来ます。（※成功のポイント②：用土に根ぐされ防止剤が含まれていること。ケイ酸白土や木炭粉を使いましょう）

元肥は、緩やかに肥料が溶け出す緩効性肥料（有機質肥料等）をお薦めします。鉢栽培では用土が限られているため、速効性の化成肥料では肥料負け（障害）を起こす危険性が高いからです。



植え付ける1週間ほど前にマグアンプK（中粒）やぼかし肥料を用土全体によく混入し準備しておきます。なお、市販の培養土を使う場合は肥料が含まれていますので成分量を確認しておきましょう。元肥は球根で育てる場合に鉢当たり50～100gとし、さし芽苗を使用する場合には100～150gとします。

(管理方法)

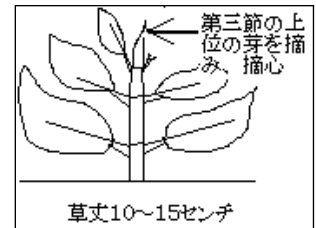
ダリア栽培管理の重要ポイント三要素は「芽摘み」「水やり」「害虫対策」です。（※成功のポイント③：鉢栽培と露地栽培の共通点です）

球根やさし芽苗を深さ3cm程度に植え付けます。植え付け後は風通しが良く、日光の充分に当たる場所に設置します。直接地面に鉢を置くと排水穴より害虫等が侵入する恐れがありますので、木材等を置いた上に鉢植えを乗せます。なお、ダリアは乾燥を嫌い、また、少ない用土の鉢栽培では水を切らすことが致命傷になります。晴れた日には日中を避け、朝晩の二回灌水します。また、鉢に直接日光が当たると鉢植え内の用土が熱を持ち、根腐れの原因になることがありますので、板等でカバーすることも良いでしょう。

（※成功のポイント④：直射日光で鉢植え内部が50℃を超えることも）

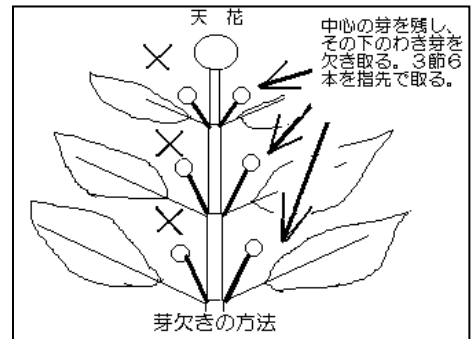
球根を植え付け後2週間ほど経過しても芽が出ない場合は、球根が腐敗している場合がありますので、球根を掘り上げ植え替えましょう。

ダリアは日光を好みますが、高冷地原産で冷涼地を好む植物であるため夏の暑さにとっても弱く、高温期（7～8月）にはすだれ等で日陰を作り、また、西日が当たらない場所に置きます。なお、夏場以外は極端に日光量が少ないと徒長しますので、日光の確保を心がけます。特に梅雨の季節には注意が必要です。



(摘芯と芽摘み)

複数の花を一度に開花させるため、また、継続して開花させるために摘心を行います。植え付け後3～4週間で10～15cm程に生長した時点で葉を6枚確認したら、中心の芽を摘み取り「摘心（芯を止める）」します。その後、4本（中大輪以上）～6本（小、中輪）の側枝を作ります。なお、側枝が30～40cm程度に生育したら、風雨等の被害を守るために支柱（4本）とリング（2段）を取り付けます。



枝が生長し蕾を持つ頃になると一枝に蕾が複数生まれてきます。花数を楽しむ小輪品種以外は、一枝に一つの蕾となるように脇芽を摘み取る（芽摘み）ようにします。

(病虫害対策)

ダリアはウイルス病をはじめ病気に大変弱い花です。その一番の対処法は、病原菌を運んでくる虫（アブラムシやハダニ、スリップス等）を寄せ付けないことです。予防のために植え付け時に粒状の殺虫剤（オルトラン粒剤等）を一つまみ散布すると良いでしょう。

また、過湿は病気（うどんこ病や灰色カビ病等）を万延させ、ダリアの樹勢を衰えさせ害虫発生の原因ともなりますので、風通しを良くすることは病虫害防除にとっても有効となります。以後は、予防剂的な



粒剤を中心として病害虫の発生が見られたら、液剤や粉剤を随時散布して防除します。

夏場の高温乾燥期にハダニが発生します。鉢栽培での最大の敵はハダニだと言っても過言ではありません。(成功のポイント⑤:とにかく暑くなる場所に置かない、ダニは農薬に対する抵抗力が強いため、殺ダニ剤は2種類以上準備する必要があります)

(追 肥)

植え付け後40～50日頃になったら、ぼかし肥料を50～100gを鉢の縁に沿って与え表土とよく攪拌させます。また、ぼかし肥料の代わりに2000倍ほどに希釈した液肥(ハイポネックスや花工場等)を週1回(7～8月)散布することも効果的です。また、高冷地原産で冷涼な土地を好むダリアにとっては、日本の夏の暑さはとても厳しく、高温期(7～8月)には活力剤や木酢液などを散布し、日本の厳しい夏場を乗り切る(克服)ようにしましょう。

なお、肥料が不足すると枝が栄養分を奪い合い競争し、早く伸びた強い枝と遅く弱い枝の格差が広がり、蕾の生育にも影響し開花時期を左右することがあります。一度に数輪の開花を見たい場合には、栄養状態(不足)にも注意が必要となってきます。

(開 花)

開花は品種によって左右しますが、植え付け日から70～90日ほどで開花期を迎えます。(6月上旬に植え付けると8月中～下旬に開花を始めます)

ただし、開花はその時の気象状況や水管理によって多少遅れることがあります。なお、開花後の散水は花びらにかからないように気を付けます。葉水を中心として株元にしっかり与えるようにします。なおダリアは、側枝の芽摘み時期をコントロールして中心花の開花を調整することが可能です。ダリアは開花後の日持ちが悪く鑑賞期間が短いため、同時期に数輪咲かせるためには開花調整法はダリア栽培には欠かせない技術といえます。

(貯 蔵)

11月に入りダリアのシーズンが終わると、露地栽培の場合は球根を掘り上げ貯蔵しますが、鉢植え栽培の場合は茎を地際(根元)から切り取り、球根が残ったままでも越年(貯蔵)が可能となります。作業小屋などの雨や雪の当たらない場所で保管します。